



京鹿子

2月号

鈴 鹿 呂 仁
拾 掬 集 その十七

雲ひとつ比良を逆さに鳩の昼
しなやかな手の目隠しや鳩の午後
冬 鳩の目星に迷ひ踏み込めず
二歩を打つ投了のなき日向ぼこ
枯木立抜けてゴールへ動きだす
懐手解いて拡げる新聞紙





風邪枕粥一椀の香の熱さ
雪をんな思案の果ての名乗りかな
出鱈目な話火鉢をまたぎをり
柚子放る湯の返り討ち笑みふたつ
一枚は討ち死にのごと朴落葉
一景は鳥の寄る辺に橋沔ゆる
天皇すめらぎや丹塗りに託す社殿沔ゆる
あらたまの清音の川陽を集む



—近詠—

鈴鹿 仁

酉の春

比叡白む一声高し酉の春

行く年や神丘鎮む日矢明り

冬の雲想ひを浮かす余情あり

—追懷—（その二十七）

闇鍋に浮く話ありをんなの座
〔平成十二年作〕

牡蠣殻の同じ形して良き伴侶
〔平成十二年作〕



近詠

和田 照海

沓音

沓音に榧の実ごころありとせば

小町井の溜るる兆しのみどり闇

榧の実の一つはいのちくれなるに

番鴨居つき泳ぎの氷室池

中也柿売切れ日和なる長門



英華採集

吾亦紅いつもどこかが手暗がり

上 田 河 西 志 帆

人は何時自分に対して満足を感じるのでしょうか。物心が付いた時から必ずある種の不安感を胸の中に宿し生き続けているのかも知れない。掲句の「暗がり」は、人が常に抱いているであろう「憂い」「気掛り」「懸念」といった内面を啓示している。そしてその不安を払拭するのは母の存在に違いない。季語の「吾亦紅」は、作者を優しく包む母をイメージさせこれからの人生の歩を伸ばしていくのである。

もみぢひとひらゆるみだしたる思考力

鎌 倉 畑 佳 与

紅葉を愛で句に成さんとする時は、人は集中力を高めその思考は沸点に到達し昂揚感が生まれると言える。紅葉が色鮮やかであるが故に、散ってゆくもみぢの様はそのひとひらでさえも佗しさ寂しさから空虚感へと変わっていく。「緩みだしたる思考力」は、作者の切なさを雄弁に語っている。

名月や足すこと引くこと不要とす

亀 岡 西 本 郁 子

名月を鑑賞する時人は、何を思い何を期待するのであろうか。古の歌人は、赤裸々に告白できない自分の胸の内を名月に託すことよって思いを伝えている。掲句の「足すこと引くこと」は、正しく名月を打算的に捉えるのではなく素直に名月に自分自身を預けているのである。作者の素直な思いが名月に伝わるならばこれらの未来へ明るい標として心の中に名月が宿るに違いない。

松本 鷹根

山眠る

刈田風追へぜ名のある山淡し

蓮枯れて影に翳添へ真鯉栖む

町並の冬日和みに醬の春

葱育て不平不満は聞き流す

山眠るその懐の陽に坐せり



近 詠

塩貝 朱千

花石路

もう跳べぬ小川の向かう銀杏落葉

白山茶花水の匂ひの曲り角

花石路の夕べ歌膝組んでみる

トルソーの背ばかり見せて小春窓

時雨忌やまだ生きてゐる古句帳



神麓集

木の葉髪 藤岡紫水

寒晴れや早瀬は白く岩に吠え
今日悟り明日迷ふかも木の葉髪
鐘の音を追ひて散り急(せ)く紅葉山
老いの日日落葉と共に流れゆく
漂ひし宙に綿虫翳持たず

寒卵 沼田巴字

早春の夜明けの池の水鏡
変る世にかはらぬ白や冬鷗
伸びやかな父の字なりし種袋
寒卵割つで自愛の独り占め
生きるとはほほゑむことや冬薔薇

室の梅 丸井巴水

冬眠の古巢は塚の北まくら
掘炬燵人工骨を休ませる
湖北にて籠り尽くせり室の梅
マネキンの五指の手袋振れなし
二八そば晦日に吸る共白髪

小六月 植村蘇星

ななかまどマガマ列島の曇り
言の葉の美しき敷島小六月
稜線を撫づるすすき穂西明り
廃校の校歌校訓秋憂ふ
凡々の中に険あり暮の秋

秋気澄む 北川孝子

秋気澄む名残のつきぬ人ばかり
夜の障子文箱に逝きし人のこゑ
深追ひの一語おもたき夜の障子
生きるてふ前進志向遠芒
露日和家族写真にほほゑみて

林檎の木 直江裕子

真砂女でしたっけ今どき衣被
きっかけはあっと見つけた秋の蝶
甘やかしリンゴのならない林檎の木
もう来られないからこれはうちの柿
ぶしっけな老い無花果の中覗く



京鹿子集

鈴鹿呂仁選

吾亦紅いつもどこかが手暗かり

上 田 河西 志帆

息吸つて止めて八月十五日

スケッチの仕上げ色鳥止まらせる

霜柱甘噛みされている領土

色鳥の色残しつつ木から木へ

赤とんぼどの子もみんな上を向き

盆踊り所作真似異国で一つ輪に

アリソナ 伊吹 之博

もみぢひとひらゆるみだしたる思考力

鎌 倉 畑 佳与

しばらくといふよき時を金木犀

逆上りあの秋空や同窓会

小春日や何買ふとなく店のぞく

遠き子のアルバム繰りし烏瓜

オハイオ 水谷 直子

秋高し光る音して鯉の口

秋風や日本のかをり友想ふ

名月や足すこと引くこと不要とす

亀 岡 西本 郁子

ホームズの子爵の怪し夜長かな

松茸は貴重品なりはるばると

秋の空木の葉ゆらゆら薄むらさき

蚊にさされそれでもすきなピアノ弾く

一隅にむしり忘れし草紅葉
信繁の袖の小菊はまだ蓄

札 幌 野村 鞆枝

筑波晴れ川に沿ひ来る芒風
霧雨に溶けゆくバスの尾灯かな

松 戸 岡山 敦子

足早に降りくる気配紅葉山
昼月を背にのせ紅葉峰下る

山路来て新蕎麦の店駐車場

酒 田 藤波 松山

風を入れ窓辺にからむ烏瓜
鱒雲唱歌うたひしあの頃に

秋晴や峠の向かう日本海

秋あかね肩で休憩青空へ

公園に園児の声縫ふ赤とんぼ

牡蠣届く酒のすすみて箸忙し

小春日や古き友の身息災に

バスの旅コスモスの群生に声を上げ

椿名の地はそばの花守る三代目

来る道行く先想ふ秋夕陽

さいたま 神田 惣介

秋冷や寡黙に列なす登校児

飛行機雲横一文字古都の秋

国会の答弁軽し秋の空

どつしりと静物のとき青ぶだう

半生を時計まはしの秋日傘

立冬のまぶた切株匂ひ立つ

惣領のうぶすな参り石路の花

満月に願ひ今宵の灯を落す

もう一つ又あと一つと芋煮かな

布川 孝子

千 葉 高野 春子

渋 川 東 秋茄子

冬銀河マイナンバーの人となる
身の丈に合うていまあり照紅葉

船 橋 元橋 孝之

一言で片づけられぬ螢草

はらませることのむりな夜残る虫

何にでも笑ふ年頃猫じやらし

天動説ちよつと信じる後の月

出し抜けに案山子と見しが動き出す

秋茄子や外では嫁を褒める妻

助けられ名園めぐり石路の花

濃茶一ぶく名邸の庭秋深し

秋の海お宮の像の錯に艶

北風に行く一人の歩み信なくば

東 京 野中 圭子

金子 正道

習志野 上野 紫泉